

INDEX

- 1 沖縄たより しげ
- 2 高橋弘のモルモン人物伝
テルマ・ギアーが語る「マウンテン・メドウの大虐殺」前編
- 3 投稿 我が家の脱会宣言 dondon
- 4 連載 リアホナを斬る (第4回) 木塚灯八
2005年1月号 大管長メッセージ「確かな道を歩みなさい」
- 5 モルモンQ & A 「トランプが禁止されているって本当?」
- 6 会報遅配のお詫び

沖縄たより しげ

屋嘉線21号、屋嘉線22号、電力柱・・・一本一本の電柱を丹念に調べていく、多い日で1日十数キロの距離を歩いていく。目の前には、沖縄県北部の山原の自然が広がっている。山道を歩いていると、綺麗な海の光景や、時折マングースやイモリなどにも出会う。なんて、美しい自然なんだろうかと心を奪われ足が止まることもしばしばである。しかし、そんなすんだ気持ちとは裏腹に複雑な気持ちが頭をよぎる・・・そう、現在私が関わっている案件(仕事)は、沖縄県南部にある「米軍普天間飛行場」の代替施設として計画が進められている「名護市辺野古沖飛行場」への移設を前提とした国からの贈り物の工事である。名目上は陸の孤島と化した沖縄県北部の振興を願った「沖縄県北部振興策」である。しかし、名護市が施設の受け入れを表明しなければ存在しない工事なのである。まさに、「あめとムチ」の関係である。基地移設の問題は賛否両論、また、政治的な背景があると思うが、これと似た現象が他にもある。

現在私が関わっている「モルモン教会」にもズバリ当てはまるのではないだろうか、「昇栄」(天国)するための条件として「奉仕」「献金」「新たな信者獲得」等を前面に押し出し言葉巧みにモルモン経を用い信者をマインドコントロールしていく。それを信じ行動した先に、本当に幸せや天国が手に入るのかどうかわかりもしないのに、彼ら教会幹部はこの活動こそが救いの道と今日も公言し信者を導いている。基地問題で例えるなら、一時的に莫大な金額が落ちてくるが米軍が地元の街へやってきた時、現実的に何が起こるのか?また、モルモンにおいては神殿の儀式において、自分の持てる全ての財産・労力・時間を教会のために使う誓約を交わし教会に仕える。その後には彼等に何が残るのか?そして、これらの活動によって誰が一番利益をえているのか?これらの言葉に明確に答えられる者がいるのだろうか。もちろん、思想・信仰の自由が保障された国に私たちは住んでいる、これらの活動に参加・反対・無視するも、私達の個人の意志に任せられており自由である。基地移設はさておき、モルモン教会に信者として5~6年関わり、2年間もの時間をフルに専任宣教師として教会に捧げてきた私は、はっきりと言える。モルモンにいくら関わっても、幸せは得る事はできないし、すぐれた人格を身につける事もできない。そればかりか、自分が今までの人生で築いてきた大切な人格や友を失ってしまう事を。もし、モルモン教会に通うことでこのようなすばらしいものを身につける事ができたとか、こんな事があった等といった事柄は、モルモン外の活動でも必ず身につける事ができる。(モルモン以外の場所の方が、逆にお金も使わずに効果的に学べるものだと私は思う)またそれとは逆に、苦い経験をしている人々の方が圧倒的に多いのが現実である。真実・神より召された権利(神権者)と言う名の下に人格を否定され、傷つけられ精神的苦しみを受け教会を去っていく人々を私は数え切れないほど見てきた。「米軍基地移設」と「モルモン教会」これらがもたらす結果は何なのか??未だ私は明確な答えを得ることができない・・・。そんな事を考えながら、沖縄での日々を送っている私がおこにいる。

高橋弘のモルモン人物伝(4)

テルマ・ギアーが語る「マウンテン・メドウの大虐殺」前編

テルマ・グラニー・ギアー写真の写実は

http://qaryo.or.tv/kakure/img/meadow_phto.jpg

テルマ・グラニー・ギアー(1916-1999)はアメリカ南部、南西部では、モルモン教徒として育てられた自分の半生を飾らずに語るおばあちゃんとしてちょっと有名な方で、エド・テッカーの映画『ゴッド・メーカー』にも出演している。テルマの曾祖父は、あの悪名高い「マウンテン・メドウの大虐殺」に関わり、教団からスケープ・ゴートにされ処刑された失意の人ジョン・D・リーである。テルマは幼いときから祖母やその妹(二人はリーの本当の娘)から様々な話を聞かされて大きくなった。しかし、次第にモルモン教の奇怪な教理や慣行、血なまぐさい歴史に深く失望し、モルモンの信仰を失う。紆余曲折の後、真のキリストに出会うという経験を、それ以降、モルモン教徒として育てられた自分の半生を、またモルモン教の人間が神になる等の秘密の教理・慣行を、そして曾祖父リーの生涯を追及し、それを率直に人々に語り継いでおり、その率直な語り口や、飾らない人柄ゆえに人々から愛されてきたおばあちゃん

テルマの曾祖父は、前述したように、「マウンテン・メドウの大虐殺」に直接関わり、後に教団からスケープ・ゴートにされ処刑されたジョン・D・リーである。すでに「マウンテン・メドウの大虐殺」は、ウェブ・サイト「モルモン教は信じるに足るか?」の中の「モルモンの隠れ教義」に、また「新興宗教を考察するページ」にもごく簡単に書かれているが、詳細はまだ日本語になっていない。そこに紹介されている内容は私が研究してきたことと若干の相違がある。

*** 事件のあらまし (高橋)

事件は1857年9月、ユタ南部で起こった。アーカンソー州からカリフォルニアに向かう移民の一行約40家族(その人数は120~137人)が、旅の途中でモルモン教徒とインディアンに襲われ、幼い子どもを除く全員が虐殺され、そのすべての財産を奪われるという事件である。開拓民を襲い、その金品財貨を略奪するという山賊まがいの行為が宗教の名によって行われたのである。モルモン教会は今日に至るまでその関与を否定し、それは一部モルモン教徒の逸脱的行動としている。そのため、この事件にかかわった人物としてジョン・D・リーは、1870年にその責任を取らされ教団から破門され、1877年に銃殺刑になっている。リー自身は教団トップの指示によって実行したことを主張、自らは教団のスケープ・ゴートであると語っている。この事件についてはアメリカ議会報告書をはじめ様々な本や記録が出版されているので、その本格的な研究がなされれば膨大な研究書になるであろう。

最近の法医学による殺された方々の遺骨の調査によれば、開拓者の死因は銃弾によるものと鈍器による強打であり、その結果、インディアンは開拓者の死に間接的にしか関わっていないことが解明されている(これで教団の主張がまた一つウソであることが明らかになった。Christopher Smith, Forensic Study Aids Tribe's View of Mountain Meadows Massacre, The Salt Lake Tribune, Jan 21, 2001)。この事件の経緯は、いずれ私自身の研究を活字にしてお目にかけたいと思っている。

*** 事件の背景 (高橋)

この事件の背景を知るには、高橋の「ユタ準州開拓史」の一読をお勧めしたい。背景にある史実の要点をまとめると以下ようになる。

(編者注同論文はhttp://garyo.or.tv/utah/history_utah.htm)

1847年、モルモン教徒によるユタ開拓が開始された。1850年、ユタは準州として承認され、翌51年、ブリガム・ヤングは準州の総督(知事)に任命された。同時に連邦から非モルモン教徒の国務長官や最高裁判所長官などがユタに派遣され、連邦政府とヤングをはじめとするモルモン教団との摩擦が再燃する。その結果、連邦役人は生命の危機を感じ、数ヶ月の後、ユタを去った。52年、モルモン教団は「多妻婚」の教理・慣行を公表し、教団の新聞に掲載。1854~55年、ユタのモルモン教徒は飢饉による深刻な食糧不足に陥る。その結果、信徒のモラルが著しく低下し、財産や土地をめぐる争いや、聖日の無視、性的逸脱や盗みが横行した。教団は、いわゆる「モルモン・リフォーメーション」と呼ばれる、教団リーダー主導による極めて暴力的な信徒粛清を実行し、暴力によって信徒の服従を強要した。教団の指導に服さない者を「敵」とみなし、おおっぴらに粛清を敢行した。かの悪名高い「血の贖罪」というヤングの教えはこのときの産物である。これは、ユタにおける狂気の時代と言ってもいい(高橋「モルモン教と暴力」を参照せよ)。

(編者注同論文は<http://garyo.or.tv/boryoku.htm>)

1857年、ときの大統領ブキャナンは、ヤングを解任し、ユタに新しい総督(知事)アルバート・ジョンストンの派遣を決定。ジョンストン将軍は2500名の連邦軍とともにユタに向かっていた。ヤングはこれをユタに対する明らかな侵略と決めつけた。「マウンテン・メドウの大虐殺」は、まさにこうした状況下で起こった悲劇だったのである。

要点を繰り返せば、ユタの飢饉と食料不足(あらゆる物資に不足していた)信徒のモラルの低下と教団による信徒の粛清・暴力的支配。そして、こうした内部粛清による萎縮した信徒の不満のはけ口として、連邦政府を「敵」とみなしそこに信徒の関心を転化するという策略を考えたのではないか。「多妻婚」や連邦軍派遣という連邦との新たな摩擦・葛藤、ヤング個人の過剰な危機意識(ヤングは疑い深い男であった)。ヤングは新しく任命されたジョンストン将軍と2500名の連邦軍がヤングの逮捕・処刑のための派遣ではないのか、と疑っていた。

*** 「マウンテン・メドウの大虐殺」(テルマ・ギアーの研究)

「マウンテン・メドウの大虐殺」はモルモン教会が全面的に関わった残酷極まりない事件であるが、いつものように、教団はその関わりを否定し続けている。そのため、証拠に基づく丁寧な論証が不可欠である。が、今回はリーの末裔であるテルマの研究をみていくことで満足しなければならない。また「マウンテン・メドウの大虐殺」は宗教に関わった史上もっとも残酷な事件であり、この残酷事件に匹敵するのは「人民寺院」のガイアナにおける虐殺事件くらいのものだということを目指しておきたい。以下、テルマ・ギアーが曾祖父ジョン・D・リーの汚名を晴らすために精魂を傾けて取り組んだ研究内容を極力そのまま伝えたいと思う(末尾で紹介したジュアニタ・ブルックスの本格的な研究を是非読んでいただきたい)。

南ユタのセダー・シティにあるモルモン本部からジョン・D・リーに再び命

モルモン・アイアン・カウンティ隊（モルモン自警団）の中佐であった。そのハイトからリーに対し、アーカンソーやミズーリーからカリフォルニアへ向かう幌馬車の一行を襲撃し略奪の指揮を執るようという命令が下ったのである。

「1857年9月7日、ステーキ部長ハイトの命を受け、ハーモニーの家を出てセダー・シティへ赴く。彼は私と、ある仕事について秘密裏に話したいと言った。われわれは毛布を準備し、古い鉄鉱場に出掛け、そこで一夜を明かした。そこでなら安全に、しかも秘密裏に何でも話ることができたからである。」（ジョン・D・リーの手記より）

その日、もしもインディアンがこの移動中の幌馬車の一行を襲うということなら、本部は認めてくれるだろうという合意に達した。また、彼らがインディアンをけしかけてこの一行を襲わせ、家畜や物品を略奪する、ということで意見が一致した。リーの手記は続く

「ハイトは、クリンゲンズミスの他数人を、そのインディアンたちを唆し、西に向かっている一行を襲撃させるために遣わした、と語った。セダー・シティからハーモニーの家に帰宅途中、セダーの二人の酋長、モケタスとビッグ・ビルに率いられたインディアンの一行に出会った。インディアンたちの顔には戦いのときの化粧が塗られ、武器を手にしていて、私が近づくと酋長は立ち止まり、ハイト、ヒグビー、クリンゲンズミスと話し合いをしたと語った。そして、幌馬車隊の一行を追いかけ、彼らを殺害し、その財産を奪え、と命令されたと語った。

インディアンたちは、私と一緒に来て指揮を執るよう欲したが、しかし、私はハイトの命令で別のインディアンのところへ行行って、援護の手はずを整えねばならないので、今夜は同行できないと告げた。そこで、我々が別のインディアンとそちらに行くまで、先に行行ってキャンプをはり、待っていてくれるように、明日は必ず合流し指揮を執るから、と約束した」（ジョン・D・リーの手記より）

そうこうする間、モルモンの指導者たちはインディアンとか、モルモン教徒たちに、襲撃をけしかけることで多忙であった。

ジョン・D・リーの妻レイチェルの1857年8月16日の日記には、使徒ジョージ・A・スミスの一行がその日ハーモニーにやってきて、翌日スミスと一緒に来たモルモン兵が戦闘態勢でパレードを行い、ハーモニーのモルモン自警団の高官にたいし、「自警団をいかに訓練すべきかを教えた。パロウンのマーティノーがその指揮を執っていた。夕刻7時に全員が集まり、そこで使徒ジョージ・A・スミスが演説をぶち、アメリカ合衆国がモルモン教徒にたいして抱いている精神 敵意と甚だしい悪意 について語った。そして集まった者が全員、父なる神の名によって喜んだ」。

使徒ジョージ・A・スミスはハーモニーの自警団にたいし新しい高官を任命したり戦闘の志気を高めたりしたが、使徒スミスはジェイコップ・ハンブリン宛の重要な書簡をも携えていた。ジェイコップ・ハンブリンはジョン・D・リーの数多い義兄弟の一人である。

この書簡は1857年8月4日付けのプリガム・ヤングの書簡であり、ジェイコップ・ハンブリンにモルモン教会のサンタ・クララ・インディアン・ミッションの責任者になるようという任命書であった。ハンブリンは書簡の内容に忠誠であるべく宣誓をさせられた。

「直ちにヤングの任命を受け入れ、その任に就くこと。ハンブリンがかねてから（プリガム・ヤングに）進言していたように、インディアンとは宥和政策を継続し、適切な関係をとることによりインディアンの友愛と信用を獲得すること、なぜならインディアンはモルモン教徒を助けなければアメリカ合衆国はモルモン教徒とインディアンをともに滅亡させるということを知らなければならないからだ・・・ こうした目的のために兄弟たち（インディアンのこと）の心と一体になるよう努めねばならない、そして友愛と一致の聖なる絆で結ばれ、すべてのインディアンがハンブリンの指揮下に入るように努めよ」

この書簡には他にも多くのニュースが含まれていた。そこには「ユタ準州に州政府高官にかんする、すべての要職に連邦政府の役人が任命されたこと、これらの高官たちは2,500名の連邦政府常備軍を引き連れていくこと。彼らは7月15日にリーヴェンワース誓を立出したこと・・・ また新しく入った報告では、私（プリガム・ヤング）を、裁判によって、または裁判なしに、絞首刑にすべきかどうかという疑義を抱いていること。他にもモルモン教徒30人余りが疑惑の対象であること」・・・続く

参考文献

Thelma 'Granny' Geer, Mormonism, Mama & Me, Moody Press, Chicago, 1986

Juanita Brooks, John Doyle Lee - Zealot, Pioneer Builder, Scapegoat, Utah State University Press, 1992

Juanita Brooks, The Mountain Meadows Massacre, University of Oklahoma, 1962

John D. Lee, Confession of John D. Lee, photo-reprint of 1877 edition. 高橋弘「ユタ準州開拓史」国際コミュニケーション学会『国際経営・文化研究』、Vol.7 No.2 2003.3

1972年、高校生の私は人生の目的は神様のようになることだという実にはっきりとした教えに共感して、バプテスマを受けました。以来、モルモン教会が真実だと信じ、戒めを守り、伝道にも出、神殿の儀式も受けて、30年近く活発会員でした。

しかし5年ほど前から、教会員の自分たちが絶対正しい、従わないあなたが悪い、子どもの自由を奪っても許される、という態度にほとほと疲れ果て、お休みし始めました。はじめのうちは神様との約束は守らなければならないと、必死の思いで聖餐会だけは集っていました。しかし次第に教会に行くということ自体が苦痛になってきて、きっぱりとお休みすることに決めました。夫も教会に対して興味を失っており、二人そろってお休みするようになったのですが、私の心の中は恐怖心でいっぱいでした。このままだと神様の御許に帰れない、滅びの子になってしまう、教会に行かない夫と結婚生活を続けていても日の光に行くことはできない、と思い本当につらい思いをしていました。

我が家の子どもたちのことも重荷になっていました。子どもが小さいときに若い女性の会長をしましたが、その時彼女たちの苦悩を目の当たりにしました。教会に行きたくないのに無理やり行かされる、行きたくないと言ったら、ひどい言葉を浴びせられる、ぶたれることもある、私には自由意志が無い。彼女たちの言葉を聞き、自分自身も教会員であることを本当に申し訳なく思いました。彼女たちの親に伝えても、子どもに正しいことをさせることのほうがずっと大事だと言うだけで、子どもの気持ちを理解しようとする親は皆無でした。私は自分の子どもたちには決してそのような思いをさせたくなかったのです。教会に行きたくないといったときも理由を聞いて神様との約束を思い起こさせることまではしましたが、無理やり行かせるようなことはしませんでした。でもこれは本当につらいことでした。子どもを正しく導かない親はその罰を受けると教義と誓約に書かれているからです。その言葉はおかしいと思いながらも恐怖を感じていました。

教会が反モルモンの情報には近づかないようにと言っていたことは知っていました。いつかは教会にかえろうと思っていた私はどのような情報があるのか知ろうとはしませんでした。ひょんなことからそれらのサイトを知り、30年以上教会の中で知られていなかった教会の本当の姿を知りました。自分が今まで本当に長い間信じていたものはなんだったのかという怒りと、取り返しの付かない大切なもの(時間、お金、友人)を失ったという喪失感とに打ちのめされそうになりました。しかしその反面今まで私を苦しめていた恐怖心が、マインドコントロールによってもたらされたものだということを受け入れることができると、心の中には今まで感じたことのない開放感と、爽快感を感じることができました。長い間「真実の教会」であると信じていたものからは決して感じることもなかった幸福感です。私は本当に自由になった、私を苦しめていたものからやっと開放されたという幸福感は30年以上信じていた教会をすっぱりと離れる決心をさせてくれました。

夫に私が長い間苦しんでいたこと、教会の本当の姿を知ってもう教会に行くつもりは無いことを話すと、長い間つらかったんだなと同情してくれました。それまでは夫との間もギクシャクしていましたが、やっと心をひとつにすることができました。それまではたいしたことでもないのに彼にいちゃもんをつけたくて、文句ばかり言っていました。そのときから彼のことを本当に愛することができるようになりました。家族を結び付けているものは、教会の戒めでも、神殿での結び固めでも、無いということが今本当によく分かります。

私たちの変化に子どもたちは敏感に反応しました。息子の一人は「教会から開放されて本当に幸せだということがお母さんたちの顔に出ている」と言いました。彼は同じように教会のことをネットで調べて「自分がどうするかは自分で決めることができるが、あの教会には行かない」とも言っていました。今留学中の娘は活発に教会に集っています。無理はさせたくないの、教会を辞めるといふ決心だけを伝えました。驚いていましたが、彼女も冷静に考えるようにすると言っていました。他の子どもたちもすでに教会を離れて時間がたっているの違和感無く私たちの決定を受け入れてくれました。

マインドコントロールの影響からすっきりと抜け出すにはもう少し時間がかかるかもしれませんが、でも教会外の人たちと何の障害も無い付き合いをすることによってずいぶん癒されています。(忘年会楽しかったです)同じ脱モルモンの人たちと意見を交わすことでも、安らぎを得ることができます。(ゆなさんいつもありがとう)

食事の前になるといつもの習慣で「はい、お祈り」と言うことがあります。モルモンの神様に祈るつもりはありませんが、食べ物を用意して下さったたくさんの人たちに感謝する気持ちは大事に持っていたいです。今回の津波で被害に合われた人たちにも、教会を通さず直接(もちろん赤十字は通してですが)支援の手を差し伸べることができることも、新しい喜びです。我が家の脱会宣言は私たちに人間としての大きな喜びをもたらしてくれました。

総大会の記事はもっと早く配布されますし、大会のテレビ中継やビデオ配布、公式サイトの掲載などにも力を入れているようです。モルモン教会が公式サイトに幹部の説教を掲載していることは私にとっては非常にありがたいことです。と言うのは私が批評している元々の記事を、リアホナ購読者でない方にも無料で読んでいただけるからです。モルモン幹部の説教がいかにおかしなものを世間の人が判断する好材料にもなるでしょう。

さて前置きが長くなりましたが、今回はヒンクレー大管長の説教です。まずジョセフ・スミス最初の示現についてこう明言することから始まります。

「すなわちジョセフ・スミスが記しているように、永遠の父なる神とよみがえられた主イエス・キリストが実際に、親しくジョセフに語りかけられたのです。」

しかしジョセフがキリストから聞いたという言葉の内容にはまったく触れていません。そうです、「すべての教会は間違っている」というあの言葉です。少し前のことで、ヒンクレー大管長はジョセフが受けたというこの言葉について「それは主の言葉です。私は主の言葉を変えることができません。しかし私たちは伝道するときにその言葉を使う必要はありません」という意味の発言をしました。これはおそらく今後、モルモン教会の標準的な態度となることでしょう。世間に知られてマズイことには知らぬフリをし、年月が経てばそんなことは昔のことですよ、今は誰もそんなこと言いませんよ、などと言い出すに違ひありません。これはモルモン教会がキリスト教社会に加わろうと画策する中で打ち出した方針でしょうが、こういうやり方は不誠実だと思います。

ヒンクレー大管長と言えば先日ラリー・キング氏のトーク番組に出演しモルモン会員の自己満足度を大いに向上させ、モルモン批判者からは相変わらずのゴマカシ答弁だと冷笑されたところですが、このリアホナの中では、バーバラ・W・タックマンという人の言葉を借りて実に雄弁にモノを語っています。

「彼らが全くしていないことがある。毅然とした態度でこう断言しないのである。『わたしはこう信じている。これはするが、あれはしない。』・・・道徳、行動規範、倫理など、いかなる価値観についても、自らの価値観をはっきりさせることを嫌がるという病が蔓延し、我々をむしばんでいるように思える。」

しかしヒンクレー大管長がこの引用した言葉を本当に大切だと思うなら、先のトーク番組でなぜ自分の価値観をはっきり表明しなかったのでしょうか？同性愛問題や女性の地位、人種問題についてあまりに玉虫色の発言が多すぎたと思います。もっとも、自分の価値観をはっきり表明せよという威勢のいいこの言葉自体が、現代の生ける預言者自身の言葉ではないというオチがついてしまうのは皮肉なことですが。

リアホナ誌でのヒンクレー大管長の説教は以下のように続きます。
「主は個人の徳、隣人関係、法律の遵守、国家への忠誠、安息日を聖く保つこと、酒やたばこを摂取しないこと、自分の一とささげ物、貧しい人の世話、家庭生活の向上、福音を分かち合うこと、そのほか多くのことについて、明確な指針を定めておられます。」

と明言した後、

「このどれ一つについても、人と争う必要はありません」と勧告のような事を述べています。しかし、実に違和感のある言い回しです。先に自分の価値観を表明せよという言葉を用いたかと思えば、今度は価値観のことで人と争うな、とはどういうことでしょうか？私にはこうしたモノの言い方は、まるでヤミ金融の取立てに来たヤクザが「来週までに必ずカネを返済しろよ。自殺したら生命保険から支払いができるがそんなことをする必要はない。そんなことをしろと俺は言っていないのだ。しかし、必ずカネの返済はしろよ」と言ってるのと同じに聞こえます。あるいは、この争いとはそういう意味ではなく戒めをどれだけ忠実に守っているかを他の教会員と競い合うということでしょうか？いずれにしても、この「現代の生ける預言者」は、自分の言葉が理由で軋轢や争いが起こってもその責任は自分にはないと言い逃れしていることだけは確かです。

最後にヒンクレー大管長は、自分の妻の先祖を褒め称えて会員の信仰を鼓舞しようとしています。モルモンの教会幹部が大好きな「開拓者を称える話」です。メアリー・ゴープル・ベイという少女が手車で西部横断をする途中、吹雪や数々の苦難にあい、母親や兄妹たちを失い、自分も凍傷のためつま先を切断するという痛ましい話です。いくらか脚色されているかもしれませんがこうした手車隊の遭難自体は実話でありましょう。当事者の方々には大変な苦労だったと思います。しかしこうした事件を信仰を称える話に転換するモルモン教会の卑劣さはいかかものでしょうか？と言うのは、遭難は明らかに教会本部の計画ミスだからです。ユタへの移住はモルモン教会の号令によって行われました。ならばその中で遭難事故が起こったと言うことは一体誰が責任を負うべきでしょうか？すこし考えれば世間の常識なら誰が責任を負うべきかは明白です。まるで教会本部への批判がこないように遭難者の信仰を称えているように思えてしかたありません。

ヒンクレー大管長の説教は、彼を「現代の生ける預言者」と本気で思い込み盲目的に賞賛するならばともかく、常識を持って読めばその内容に同意できる部分は全く無くなってしまいます。

モルモンQ&A 「トランプが禁止されているって本当？」

Q：先日、お休み会員の家を訪問した時の話しです。訪問先の方から「モルモンはトランプでさえ禁止されているんだよ。知ってた？」と皮肉まじりに言

がったところですよ。とても本当のこととは思えません。実際はどのようなのでしょう。

A：このお休み会員さんは良くご存知の方だとお見受けしました。確かにモルモンの予言者はトランプ遊びを禁止しています。今は絶版になっていますが、ジョセフ・F・スミス著の「福音の教義」には以下の記述があります。

「トランプ遊びは確かに私たちの使命と相いれるものではない。トランプ遊びにふけている人をワード・ティーチャーに召すべきではない。彼らは自分の行なっていないことを矛盾なく奨励できるはずがない。トランプ遊びの場は非常に多くの口論の場となり、憎しみを生む所となり、熱中する人々の心によく生じる嘘と欺きを正当化させようと殺人を犯す場となっている。私がこの問題についてしばしば強く述べるのは、末日聖徒を公言する者の家庭でトランプ遊びが流行しているという確かな報告が来ており、それを警告するためである。教会の全役員はトランプ遊びから生じる危険を防ぐ責任がある。祈りの気持ちと熱意を込めて、悪を根絶するために全力を尽くす義務がある。『悪魔は湿っている物なら何でもずぶぬれにしたがる』という古の格言を絶えず心に留め、ばくち打ちになる前に家庭でのトランプ遊びをやめようではないか。」(同書p320)

読んでばかばかしいかぎりですが、モルモン教会は現在もこの予言者の言葉を訂正していません。今も予言者の勧告は神の言葉として有効なのです。もちろん、ほとんどのモルモン教徒はトランプ遊びくらいはするでしょうし、教会も厳しくこれを禁止することはしませんが、この言葉が如何に現実離れしたナンセンスなものか分かっているからです。でも、予言者の言葉を変更することはできませんから、せいぜい会員の目に触れないようにするのが精一杯なのです。そのお休み会員さんの言い様が皮肉まじりに聞こえたのは、教会のやっていることが、あまりにその場しのぎで、いい加減な事を言っているからでしょう。

たかがトランプのことですが、ここが考えどころでもあります。重要なことが分かると思います。つまり、「モルモンの予言者は間違ったことを教えている」(つまりニセ予言者である)。「モルモン教会が予言者の言葉を隠し従っていない」(つまり教会が堕落している)。「モルモン教会員が神の言葉に従っていない」(ただし信者にはこの予言者の言葉は隠されていて、教会は信者に知らずに罪を犯させている)といういずれかになるのです。そのいずれであっても、モルモン教会は真実の教会ではないと言う結論になるわけです。

会報遅配のお詫び

発行担当者の急病とPCシステム上のトラブルが重なり、本号の発行が遅れました。原稿をお寄せいただいた方々、読者の皆様には多大なご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。今後は編集体制の強化を計り、発行に支障をきたすことのないように勤めて参ります。

ニュース

勇気と真実の会は会員募集中です。

詳しくは当会へお問い合わせください。

「素顔のモルモン教」の再版が出来ました。当会から購入されると、加筆と修正の入った別冊CD-ROMの特典付きとなっております。

<http://seitonomichi.maxs.jp/mart/mart>

勇気と真実の会は会員募集中です。

詳しくは当会へお問い合わせください。

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。

文章はプレーンテキストで作成してください。

メールマガジンバックナンバーはこちらから

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

メールマガジンの購読申し込みはこちら

http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmaqa.htm

- ・ 発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・ メールアドレス jemnet@infoseek.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.

無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。

転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カブライトより配信されました。